［クラブレポート連載］

J3の鼓動

VOL.11

アスルクラロ沼津（東海リーグ1部）

AZUL CLARO NUMAZU

「地に足をつけながら」

ひとりの元高校教師が作ったスポーツクラブが、すべての始まりだった。基盤も施設もなにもない組織は、そこから着実に発展し、地域に根付いていく。そして今、トップチームはJ3参入を見据え、一歩ずつ前へ進んでいる。

取材・文・写真●前島芳雄（フリーライター）　写真協力●アスルクラロ沼津

いまだトップチームの戦力不足は否めないが、下部組織との連動も順調で、地盤をしっかりと築いている

園庭からスタートした複合型スポーツクラブ

今年6月、アスルクラロ沼津がJリーグ準加盟申請書を提出したというニュースが流れた時、おそらく多くの人が「そんなチームがあるの？」と感じたことだろう。静岡県内でさえ、お膝元の東部地域以外では、その名前を初めて聞いた人が少なくなかった。

だが、アスルクラロ沼津を知れば知るほど、Jリーグの理念や百年構想にこれほどピタリと当てはまるクラブはないと気づくはずだ。

チームの母体であるアスルクラロスポーツクラブは、04年のアテネ五輪日本代表監督を務めた山本昌邦の実弟であり、社長の山本浩義が、1990年に「沼津セントラルスポーツクラブ」として立ち上げた複合型の地域スポーツクラブだ。とはいえ、結成当初のスタッフは山本を含めてふたり。活動内容も、幼稚園の園庭を借りて園児たちにサッカーを教えていただけだった。基盤も施設もないところからスタートしたのだ。

国士舘大を卒業して2年間、高校教員だった山本は、同僚に幼児体育のサッカースクールを紹介された際、「ある程度でき上がっている高校生を育てるより、この段階から教えたほうが楽しいんじゃないか」と感じて高校を退職。埼玉のスポーツクラブで指導経験を積み、90年に故郷の沼津で事業を開始した。

初めの3年間は資金繰りが非常に苦しく、山本も前所属のスポーツクラブの仕事を並行しながら、なんとか経営を支えていた。だが、93年にJリーグが誕生してからはスクール生も一気に増え、初年度に入った生徒たちが小学1年生、2年生と進級するにつれて対象年齢を拡大。当時から静岡県東部のほとんどの小学校にはサッカースポーツ少年団があったが、山本の熱血指導を慕う子どもは多く、チームが年々成長して結果も伴うようになると、スタッフも増えていった。

ジュニアユース部門は、兄・昌邦の縁もあって97年からJ1の磐田と提携し、「ACNジュビロ沼津」（ACNはアスルクラロ沼津の頭文字）として活動。近年、U―15年代では磐田や清水とともに県内3強を形成しており、Jクラブのジュニアユースを破ることも珍しくない。今季に清水へ加入した加賀美翔など、これまで3人のJリーガーを輩出し、今なお県東部の最強チームとして有望な選手が揃っている。

現在では自前の人工芝グラウンドを2面有しており、20か所近くでスクールを開催して、フットサル場も経営している。さらには新体操とテニスのスクール事業や、老若男女を対象としたスポーツ&カルチャースクールも開講するなど、会員数2000人を超える地域の一大スポーツクラブに成長してきた。

そうした流れとは別に、トップチームの歴史は77年に設立された「沼津アーセナル」（後の「沼津香陵クラブ」）という社会人チームからスタートしている。ここでは、山本自身も選手としてプレーし、監督も務めた。そして2006年に「アスルクラロ沼津」と改名してクラブのトップチームに位置づけられ、3年前にはジヤトコサッカー部などで豊富な指導経験を持つ小花浩司が監督に就任。以降は本格的に強化を進め、下部組織出身の選手も徐々に増えてきた。獲得タイトルこそ05年の静岡県リーグ2部優勝のみだが、昨年は東海2部で2位に入り、今年から東海1部に挑戦している。ただし、今年初めの時点では、まずはJFL入りを目指してチーム作りを進めており、山本もまた、すぐにJリーグ準加盟申請をするなどとは、考えてもいなかった。

トップダウンではなくボトムアップでJ参入へ

そんなクラブがなぜ、急にJ3参入に名乗り出たのか。そのきっかけは、今年3月に遡る。

2014年にJ3が誕生するという新聞記事を山本が読み、「参入の条件を見たら、スタジアムも愛鷹（広域公園多目的競技場）でいけるし、他の条件もほぼ満たしているんじゃないの？」と思ったことに端を発した。前述のとおり、下部組織はもちろん、自前の練習グラウンドも所有しているのだ。

Jリーグの関係者に相談しても、「山本さんのところはかなり条件が整っているほうですよ」と言われた。さらには地元に拠点を持つスルガ銀行社長の岡野光喜（静岡県サッカー協会会長）や兄の昌邦（静岡県サッカー協会会長理事）にも後押しされた。その結果、準加盟申請を決断したのだ。

アスルクラロ沼津が現在J3入りを目指している他の多くのクラブと異なるのは、トップダウンではなく、ボトムアップでJリーグに至ろうとしている点にある。つまり、初めからJを目指して立ち上げた組織ではなく、地域に密着したスポーツクラブを目指して無我夢中にやってきた末に、気づいたら「もしかしたらJに入れるんじゃないの？」という雰囲気になってきたわけだ。

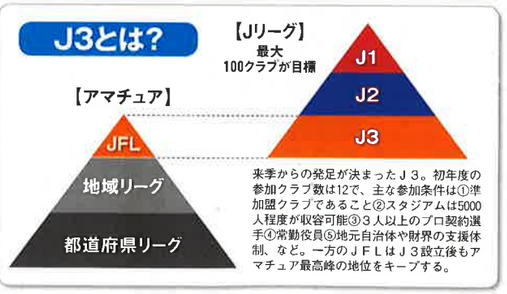
だがそれはある意味、Jリーグが掲げる理想を体現していると言えるだろう。地元への浸透度や基盤の安定は申し分なく、行政の協力体制も整っている。トップチームを頂点とするヨーロッパ型の総合スポーツクラブとして発展できるポテンシャルを、強く感じさせるのだ。

山本も「もちろんJ1で優勝するようなチームになることが理想ですが、J3で戦っていたとしても、『あそこはすごく地域密着しているよね』とか『J3なのにスタジアムにはいつも3000人以上入っているよ』とか『すごく育成の上手いチームだね』と言われるようになることが当面の目標です」と話している。

9月17日には無事にJリーグ準加盟が承認されたが、その要因として、クラブの姿勢がJリーグ側にとって非常に良いモデルケースであると考えられた側面もあるようだ。

ただ現実的に判断して、今すぐJ3で戦えるような戦力は持ち合わせていない。今季は東海1部で4位に

昨年完成したクラブハウス。フットサル場に隣接し、人工芝のグラウンドからもほど近い

11年から指揮を執る小花監督。就任以降、クラブは成長を続け、13年には東海1部に辿り着いた

山本昌邦氏の実弟である山本社長。今年3月にJ3設立の記事を見つけ、参入の可能性を探る